

紙つづて

科学の創造に方程式はない。大発見は論理の積み重ねだけでは困難で、意図を超えて別の研究から突然生まれることが多い。不確実性こそが心の拠り所とを感じる。一方でパスツールは「幸運の女神は用意された人へのみ訪れる」という。偶然と必然の出会い、幸運をつかむ能力をセレンディピティーとよぶが、基礎力は準備しなければならない。

科学は巨大な建築。先人たちの築いた礎の上に、大小の石を積み上げる作業だ。着実に進歩を遂げる。しかし、創造とはこの美しい建築の伸長を目のあたりにしなから、小さくても、あえて別の場所に一つ石を置くことを指す。非連続な飛躍の始まりだが、既成概念との決別であり、決断と大きな勇気がある。

のより 良治
野依

創造性を育む

何より自学自習、過度な規律や教化は鋭い感覚の育成を損なう。権力や体制も保守的意識をつながす「家元制度」ではなく、非正統や前衛、異端を許容しなければならぬ。哲学軽視、効率偏重の競争環境ではなく、寛容が創造性を育むことは間違いない。名古屋が生んだ大科学者には、生活の糧や名利栄達を求めない献身があった。ユニークな学歴や職歴も才能を育んだ。自ら未知にむけて問題を設定し、解決した共通点をもつ。

土星型原子モデルの提唱者、長岡半太郎が「日本人にも科学ができるか」と自問し続けてから、わずか百数十年。歴史は浅くても、独特の日本人の発想の背後には飛鳥・奈良時代からの豊かな文化があると信じる。精神性あふれるこの営みを糧に、若者の創造性を育成しなくてはならない。(理化学研究所理事長)

2013.3.25